

あひま

2012.3.10.

学校体育研究同志会東京支部 西多摩ブロック

2月例会 冬大会基調報告解題とポケシューゲーム実践報告

2月26日(日)にあきる野・一の谷小で西多摩ブロック2月例会が開催されました。

この日のまず一つ目は、2011年冬大会の基調報告を、作成者自らが、西多摩ブロック例会の参加者に、わかりやすく話してくれました。二つ目は、授業づくりについて例会で論議されてきた「ポケシューゲーム」の実践報告がされました。参加者は7人でした。

近況から

前回提案されたベースボールについて考えたことが二つある。ひとつはバッティングの基本はバントというよりもミートと言った方がよいのではないかということ。もう一つは、剣道では両手を離して竹刀を握るのに(ずっと昔は両手をくっつけて刀を握っていたらしいが)野球では両手をくっつけてバットを握ることの意味だ。(Aさん)

去年の夏大会でフラッグフットボール分科会で学び、今、フラッグフットボールをやっている。しっぽとりゲームから始まって、楽しくできている。子どもたちでチームを決め、キャプテン会議を中心に進めている。いちばん運動の苦手な子も2点を取ることができ、「友だちがわたしのために道をつくってくれた。」という感想を出していた。全員タッチダウンをめざしてやっていきたい。(Bさん)

一昨日、教師道場の公開授業を終えて解放された気分だ。抱え込み跳びと頭跳ね跳びを子どもたちはできるようになった。反省点として指導力のなさとかを感じる。「楽しい」「できる」「今日やってよかった」と思えるようにさせるために、計画的にちゃんとやっていけるようにしたい。私の課題と子どもたちの課題を整理して6年生をスタートさせたい。(Cさん)

算数の少人数担当を2年前からやっている。体育はやっていないが、算数がおもしろくなってきた。子どもたちは答えを急ぎ「やり方を教えて」と言ったり、まちがいを恐れて言わなかったりする。まずできさせて、その後振り返ってどうしてかを考えさせる。意味づけを後回しにしないと、食いついてくる子が少ない。担任といっしょにやっているのでも、どうしても教科書中心になってしまうが、自分のやり方も取り入れている。(Dさん)

子どもたちに関係認識を育てることの大切さを先生たちに伝えたいと考え、はたらきかけた。友だちのことを自分のこととして考えられる力を育てなくてはならない。関係認識を育てるためのていねいな指導が学級を育てる。また、子どもたちの思考力を深めるために、教師が思考の方法を教えなくてはいけない。(Eさん)

消しゴムを拾おうとしたら縄跳びが落ちていたので拾ってあげた子が、取られたと誤解されてトラブルになったとき、クラスの子は拾った子の気持ちをわかってあげることができた。

いろいろな事件が起こるたびに、「今、大切な勉強をしているんだよ。」というようにして、子どもたちは成長してきた。遊ぼう会のリーダーたちも90人の前に立って緊張しながらもがんばり、みんなで楽しく遊ぶことができた。(Fさん)

午前中、「たのスポ」5月号の原稿を書いた。教師になっての3年間を書いた。1年目はうまくいかなかったが、次の年、1年生の担任としてがんばれと言われ、子どもたちが楽しいと言ってくれることに支えられ、しっかり考えて授業ができるようになった。子どもたちの跳び箱もうまくなってきたと実感できる。3年目のところは、「新しいシュートゲームを考えている。今日もこれからサークルに行きます。」とまとめた。(Gさん)

冬大会基調報告解題

2011年12月に愛知県犬山市で行われた第143回学校体育研究同志会全国研究大会(冬大会)の基調報告者が、西多摩ブロック例会でわかりやすく話してくれました。

体育における技術指導研究の課題

- 「技術指導研究とは何か、その成果と今日的課題を探る -

*全体がつながって
いてなくてすみません。

冬大会で使われたプレゼンテーションを使って話をしました。そのプレゼンテーションも、この「あらうま」といっしょに送りますので、全体の内容についてはそちらを見てください。また、ご希望の方には冬大会の提案集のコピーを送りますので、ご連絡ください。ここには、この日の話から印象的だったところを書いておこうと思います。(冬大会提案集やプレゼンテーションから引用してあるところもあります)

人間がしあわせになるための技術

例えば環境を破壊してスキー場をつくったとして、それは本当に技術と言えるのか。人間にとっての技術は、環境を視野に入れていなくてはならない。人間がしあわせになるための技術でなくてはならない。発電所が東電のものでなく国民のものとしたら、原発ではなく、もっと風力発電や水力発電の研究ができるようにするためにお金を使っていくことができる。

競技力をどうつくるかということにも課題がある。お金さえあれば、優秀な選手をどんどん引っっこ抜いて持ってくるということが許されていいのか。

人間のための技術なのだから、跳び箱の工夫として、長さややわらかさ、踏みきり板の材質などについて考えることができる。

環境について言えば、けががなくこわくなくという体育の場づくり(器具・道具・教具・装置など)なども、技術の中身であり技術学習に関わっている。

技術指導研究は今日の「ともにうまくなる」実践課題の中に引き継がれている

戦後、学校体育に「近代スポーツ」が受け入れられてきたが、子どもたちを近代スポーツに当てはめることで、子どもたちをスポーツ文化から遠ざけ、「へたにさせられてきた歴史」を生んでいた。それに対して、民主体育を追求する教師たちは「子どもの喜びを高める」指導法の研究をスタートさせ、ドル平の誕生を契機に「技術の系統性」を前面に押し出してきた。その後「うまくしてどうする」が問われ、「技術の系統性」問題を生み、「技術と集団」の課題から、異質共同のグループ学習も提起された。さらに「奪い取らせる指導」「学習活動の対象化」や「みんながうまくなることを教える体育」の提案があり、「教科内容と教材の峻

別」の提起から「試案」を発表する。これらの成果を踏まえて、今日の「ともにもうまくなる」実践課題の中に引き継がれている。

「ともに」というのは子どもの関係性を育てることにつながっている。

文化特質を失わない範囲で単純化した最小単位の技術...基礎技術

基礎技術の規定

1. 学習（習得）しようとする運動文化の本質（特質）を形成している最小単位の技術
2. 最初に練習し最後まで質的に発展する内容をもった技術
3. 学習（習得）する運動文化の技術習得について、誰もが必ず体験し、習得しなければならない技術
4. ある程度の運動量を有し、児童生徒が興味をもって、容易に習得できる技術。
（運動量というのは体を動かしている時間や運動の強度という意味ではなく、その技術を習得するためにある程度の習熟のための練習が必要であると解すべき）

運動文化は過程としての文化

運動文化は、「自分たちはどういうサッカー文化を楽しむのか」「どういう学級をつくりたいのか」「どんな人間的な生活を送りたいのか」という願いや価値観に関わって、今ある運動文化と、運動文化を行う活動と、つくりあげられた運動文化が相互作用をしながら発展していく、活動や創造の過程としてのものと捉えておきたい。

技術の位置を考える課題

お金を持った人たちは、技術が世の中を発展させると考え、合理化し、人から機械にかえて労働者が切り捨てられていった。

一方、手の延長で技術は成り立っていると考える人たちは、人間の労働が一番大切だと考え、技術とは労働手段の体系だと考えた。（労働手段体系説）

武谷三男は、科学の法則を意識的に応用できる力が技術だと考えた。（意識的適用説）

城丸章夫は、いろいろなやり方が組み合わさったものを技術と呼ぼうと言い、人間の身体運動が大切だと考え、技はそれをはかるためのものだと考えた。

子どもの側からの「再構造化」と「系統化」

跳び箱運動には、踏み切って、腕支持跳躍し、身体表現空間を創出して、着地する、という技術構造があるが、跳び箱を跳び越せないでいる子がいたとき、その原因はどこにあるのかという技術認識をつくりださなければ跳べるようにならない。一般的な技術の構造的認識とは別の、子ども（主体）の側からの身体運動の「構造化」「系統化」がなければ、真の技術（の構造的な）認識とは言えない。子どもの事実学び、教師と子どもとが共同作業をしていく「再構造化」が、「ぼくらの文化」を創っていくことになる。

「支持回転」技術

器械運動は「支持回転」による技の表現である。支点である腕支持の機能に注目すれば、器械運動は「てのひら」支持と「にぎり」支持に分けられる。器械運動全体をくくる基礎技術として「支持回転」技術とした方がよい。個別運動群については、運動手段（マット、跳び箱、鉄棒）で区分けしながら、それぞれの具体的な支持回転技術を中心にしてこれに動力系の「踏み切りを含む」や「スイングを含む」を入れて表せばよい。

ポケシューゲーム授業報告

「ポケシューゲーム」の授業報告がありました。

チームのキャプテンはやりたい子を募り、周りの子どもたちも納得した上で決定し、そのキャプテンと担任との話し合いでチームを決めたということでした。技術面や友だち関係を考慮して決められていたということで、教師にとってはうれしい驚きだったようです。

第1時間目（1月19日）

* 授業のねらい

- ・ポケシューゲームで学ぶこと（空間を意識したゲーム、協力して作戦を成功させる、みんなで楽しむ）を理解する。

* おもなルール

- ・4人对4人（キーパー1人、順番で）
- ・ワンバウンドボールでゲーム開始。ボールを持って動いてよい。
- ・人が持っているボールは取らない。
- ・1回以上パスしてからシュートする。（マスターシュート）

* ゲームのようす

- ・速攻が多く、同じ子がシュートする傾向があった。
- ・シュートした後、自陣に戻ってディフェンスをしていた。かなりの団子状態。
- ・ゴールのバーに当たったボールは得点にすることを確認。
- ・ゴールキーパーが痛そうだった。シュートラインの位置を検討することに。
- ・相手のシュート後、キーパーがボールをなげるところから再スタートするが、パスがつかない。

* 授業の振り返り

- ・ワンマン的なプレーを当人は気づかなかったが、キャプテンが意識していた。

第2時間目（2月2日）

* 授業のねらい

- ・タッチポケシューゲームで、空いている空間を見つけて、パスをもらってシュートする練習をする。

* おもなルール

- ・2人（攻め）対1人（守り）
- ・守りはボールを持っている人にタッチする。タッチされた人は味方にパスする。
- ・そのほかはポケシューゲームと同じ。
1回シュートしたら役割を交代して練習する

* 振り返り

- ・練習に入ってから再度集めて方法を確認したがうまくいかなかった。タッチポケシューで練習することの目的をはっきりと伝えられなかったということもある。

第3時間目（2月9日）

* 授業のねらい

- ・タッチポケシューで練習したことを生かして、空いている空間を見つけ、できるだけパスをもらってシュートする。

* 振り返り

- ・わかっている子は考えながらパスをしていた。パスが通り、シュートできたケースも増えた。
- ・わかっている子、シュートがしたい子は、遠くからでも、マークされていてもシュートする。
- ・シュートゾーンを広げたので、キーパーが上手に止められた。
- ・コンビネーションプレーに着目することが多くなった。

第4時間目（2月16日）

* 授業のねらい

- ・空いている空間を見つけ、できるだけパスをもらってシュートする。

* 振り返り

- ・2：0で練習した形をとろうとキャプテンが必死に指示を出し、動きが止まってしまうこともあった。
- ・キーパーからのパスが通るようになってきた。反面、相手のことを考えずに強いボールを投げてしまうキーパーもいる。
- ・マスターシュートを意識しすぎて、敵がいても無理やりパスしようとすることもあった。

第5時間目（2月23日）

* 授業のねらい

- ・協力して、シュートできる作戦を考える。（チームの作戦づくり）
- ・授業の後半には、試しのゲームを行う。

* 振り返り

- ・どこをねらうとシュートが入るのかを考え始め、キーパーの足元をねらったのシュートが出てきた。
- ・2：0の動きがよくわかっているチームとわかっているチームとの差がある。
- ・作戦図にかかなかつたので、きちんとした作戦にならなかった。（作戦図がかけるのか？）
- ・動きが広がってきた。

課題

- ・空いている子を見つけてパスしシュートにつなげることはかなり理解が進んだが、わかっている子への手立てが不十分。
- ・シュート記録をつけなくてしまった。
- ・作戦を立てる上で、具体物を使っての細かい手立てが必要。

例会で出た意見

- ・もう少し授業時間があれば、空いている空間で意識的に2：0を使うことがもっと広がっていこう。
- ・ゲーム人数は（多摩サークルで言われたように2：2ではなく）3人でよいのではないか。3人なら2：0の組み合わせがもうひとつできる。作戦づくりの中で、
ちゃんがボールを持ったら ちゃんがパスをもらう、
ちゃんがボールを持ったら ち

やんがパスをもらう...というように組み合わせを考えておく。つまった時には一人が後ろに下がってボールをもらうということも3人ならできる。

参加された方の感想から

E先生が最初に言っていた「他人の問題をいかに自分のこととして考えられるのか」ということを、さっそく明日から実践していきたい。「ぼくには関係がない」ではなく、自分自身も関連づけ、クラス単位として考えられるようにしていきたい。

ポケシューゲームでは、いよいよ今週、大会本番なので、最後の練習で何をねらいにするのかももう一度考えてから授業に臨みたい。

(Gさん)

E先生のお話

資料を再度読み直し、自分の中でも整理しておきたいと思いました。いろいろ奥が深いんだな...と思いました。

ポケシューゲーム

2年生になって、とって上手になっているのがビデオを見てわかりました。自分だけでなく、チームの子の活躍も自分のこととして喜べる関係ができています。低学年にも関係性は理解できるということなんだな...と思いました。(Cさん)

Eさんの「思考力を育てるということ」の資料、そして教師は子どもたちの関係性を育てていくという話がすごく納得でき、ためになった。

また、子どもたちと体育をやっていく中で、運動文化を大事にしていくことが大切である。目的としている。今回のポケシューゲームを通して、それがまさに証明された気がする。

次回、しっかりと整理し、指導計画がつくれたらと思います。

(Fさん)

“学級で運動文化を楽しむ”という考え方が、私には足りなかったように思う。ともいうまくなること、それが全体で楽しむことにつながるのだという体育のあり方みたいなものが整理された。

今担任している子たちと、跳び箱運動を行った際、個人が技術をみがくことに執着する子がものすごく多かった。今日のサークルの中で、技術の値打ちは、人に教えること、共有することにあるというお話が、とても心に残った。

(Bさん)

今日も勉強になりました。授業とは「教師と子どもとの共同作業」そうだった！と反省しました。一方通行の伝達ではなく、ともに考え、学び合う、そのための仲間が必要だということ、生かしていきたいです。

春の学習会でもよろしくお願ひします。

(Dさん)

ポケシューゲームの実践報告の中で、パスを意識してプレイができるようになってきたことが話されていましたが、ビデオを見てそのことがよくわかった。子どもたちもパスを大切に思っているようだし、パスからのシュートのおもしろさを感じているように思う。

冬大会基調報告作成者の報告もわかりやすかった。冬大会で作成者自身が話すことができたなら、参加者の受け止め方ももっとちがっていたのではないだろうか。

子どもの思考力を高めるということからも学ぶことが多かった。(Aさん)

